

下水汚泥肥料利用促進シンポジウム
パネルディスカッション概要

1. 日 時 : 令和7年11月30日(日)

2. 場 所 : 宮城県石巻合同庁舎1階大会議室(宮城県石巻市あゆみ野5丁目7番地)

3. 発言要旨

【パネリスト】

- 岩沼市で農業を営んでおり、4年ほど前の肥料高騰をきっかけに、3年前から汚泥肥料のテスト栽培を開始した。現在、41.7haのうち、12haの水稲で、窒素要求量の約2.5kgを汚泥肥料で補っている。ひとめぼれで平均約628kg(10俵超)、みやこがねもち(もち米)で540kgを超える収穫量を達成し、下水汚泥肥料だけが理由だと思っていないが、相乗効果として毎年収量が少しずつ増えている。化学肥料と遜色ないと感じている。安価に手に入るならいつでも利用したい。
- 散布の際に風で飛散しにくく、既存の機械で散布可能なペレット状のものが望ましい。
- 石巻市の旧河南町で農業を行っている。本日の農林水産省の講演を聞いて、ある程度安心した部分はあるが、下水汚泥肥料の「汚泥」という消費者的なイメージ、そして重金属や抗生物質などの混入による長年の土壌への蓄積が不安である。
- 当法人が行っている乾田直播では、通常よりも窒素分が必要となる。肥料が高騰しているため、窒素分を高いものを選んだ結果、リン酸・カリが若干少ないものを使用しているのですが、リン酸が含まれる汚泥肥料を試験的な形で使ってみたいと思っているが、県内外を問わず、そういった事例がないようだ。普及のために栽培試験を増やしてはどうか。
- 「汚泥」は「汚い泥」と書くので、イメージが悪いというのは理解できるが、海外から輸入する肥料は化石燃料や鉱物資源に由来している。汚泥肥料を、「地域循環」で育った作物、環境に良い取り組みをしているという本質的な観点からPRすることが有効である。また、北海道の「じゅんかん育ち」のように、地域独自の名称をつけることも効果的だと思われる。
- 栽培試験やペレット化のための機会導入に当たっては、農林水産省の補助金を活用いただくこともできる。また、菌体りん酸肥料として登録すれば、他の肥料と混合し、肥料メーカーを通じて使いやすい製品(ペレットなど)に調整した上で農業者に流通させるという新たな販路が開け、更なる普及に繋がるのではないかな。
- 肥料の生産を実際に始める前に地域の方の意見を聞き、発信する機会を設けるのは重要。今後こういった場を大切に、地域の声を反映していただきたい。
- 汚泥肥料にもみ殻などを混ぜてpHを下げる(酸性度を上げる)と、アンモニア臭が落ち、臭気対策に繋がる。
- ペレット化はコストが上がるため、コスト増と利便性のバランスを考慮して決定すべきである。
- 安全安心のためには透明性を確保していくことや、小さく試しながら、広げていくことが重要だと思う。そのためには様々な知識を共有し合って、適切なやり方を地域で考えていくということ

が望ましい。こういった場を、是非この地域でも続けていって欲しいと思う。

【佐々木 健志】(宮城県企業局 水道事業推進専門監)

- イメージ戦略については、県の農業試験場や高校での試験結果など、安全性や収量向上に関する地道なデータを公開し、理解を深めてもらうことが最初のステップと考えている。また、本日のシンポジウムで御提案いただいたアイデアについても検討していきたい。
- 県の汚泥肥料化事業は DBO 方式(設計・工事・維持管理の一括発注)で行う予定のため、肥料の販売等については、ペレット化を含め、農業関係者の意見を事業者伝え、検討してもらうことになる。

【来場者】

- 汚泥肥料の成分や効果などを詳しく知りたい。
- 使用に当たって、実際に使用した肥料の量や収量等について具体的に教えてほしい。